



参加無料

京都大学東京オフィス（新丸ビル10階）にて開催

第154回京都大学丸の内セミナー

現地×オンライン



文学無用論 —フィクションは何の役に立つのか？

令和8年10月2日（金）

18:00～19:30

講演者：森本 淳生（人文科学研究所・所長）

近年「役に立つ」技術や学問ばかりが推奨され、文学研究の持つ意義が強く問われるようになってきました。文学、あるいは、フィクションは役に立つのか立たないのか。そもそも「役に立つ」とはどのようなことを意味するのか。一見役に立たないように見えるものにも役に立つところがあるのではないかと。こうした問いを考えることは、文学やフィクションを越えて「人間」そのものの意義を問うことにもつながります。おもにフランスの文学と思想を手がかりにしながら、文学の「無用の用」について考えてみたいと思います。

文学無用論
フィクションは何の役に立つのか？

森本 淳生
京都大学人文科学研究所

丸の内セミナー 2026年10月2日


【講演内容】

- I. 切り捨てられる人文系？
- II. 役に立つとはいかなることか？
 - (1) 目的と手段
 - 物質的目的
 - 精神的目的（生きる意味の実感）
 - (2) 「地球消滅」後を生きるのびる
- III. フィクションの意義
 - (1) 有用性
 - 古典主義詩学：「楽しませながら教える」
 - アリストテレス詩学と「カタルシス」
 - 政治的プロパガンダ
 - (2) 自己と異なる存在を知る
 - 異なる時代・文化・人格
 - 社会の周縁：疎外された人々
 - (3) 成熟のために：言語の涵養、経験の複層性
 - (4) 「無」の経験：ステファヌ・マラルメ
- IV. 人間存在の理解に向けて

オウィディウスの説
— 悲劇の力学と感情のメカニクス —
LE TRAGÉDIEN CONDUIT
HIS VERTUS TRAIHENT EN TRAISSON
William Marlowe

カタルシスとは


カタルシスとは「混合した体液を平衡状態に戻す作用にほかならない。悲劇が引き起こす同情は、黒胆汁の混合体液のなかに熱をためこむ。恐怖は反対に、この過剰な熱を冷まし緩和する。[...]」このようにふたつの感情の作用が交互に継起していく運動のなかで過剰なものが緩和され楽になるから、快が感じられるわけである。[...]」実際、治療作用はある。というのも、平衡状態が回復されるからである。」（ウィリアム・マルクス『オウィディウスの説』）



フィクションの意義：有用性

社会から疎外された人々を描く
—ヴィクトル・ユゴー『レ・ミゼラブル』（1862）

文学は、社会から疎外された人々、役立たずと決めつけられ、ときには害毒、危険とみなされる人々にも視線を注ぐ。窮乏した家族のためにパンを盗んだだけで19年も徒牢で過ごすことになったジャン・ヴァルジャン。娘を養うために売春婦に身をおとし、ついには髪や歯までも売ることになるファンティヌ。寒い冬の日に水を汲みに行かされるなど数々の虐待を受けるコゼット（左）。そして、貧弱な正義概念にとりつかれて人間性を失った警部ジャヴールにいたるまで、ユゴーの『レ・ミゼラブル』は疎外された存在に満ちあふれている。ユゴーは、コゼットと貴族の青年マリウスの結婚、臨終の床でのジャン・ヴァルジャンとこのふたりの和解をとおして、疎外が克服される希望を描き出そうとした。



フィクションの意義：自己と異なる存在を知る



京都大学研究連携基盤
Kyoto University Research Coordination Alliance

受講申込みはこちらから

右のQRコードまたは「京都大学研究連携基盤」で検索

<https://www.kurca.kyoto-u.ac.jp/seminar>





参加無料

現地×オンライン

京都大学東京オフィス
(新丸ビル10階)にて開催一括申込が
できます!

京都大学丸の内セミナー

令和8年度 統一テーマ「世界をリードする京大の知－環境・生命・人間をめぐる最前線－」

丸の内セミナーは、首都圏在住の社会人を対象とした「大人のための高度な教養講座」としてスタートし、附置研究所・センターで展開されている最新研究をわかり易くお伝えすべく企画・開催してきました。ハイブリッド方式（対面&オンライン）で、年間テーマのもと6回シリーズとして実施することとなり、より多くの、一般の方々や大学生・高校生の方々にもご参加いただいています。2026年度は、「世界をリードする京大の知－環境・生命・人間をめぐる最前線－」というテーマのもと、研究の多様性と醍醐味を感じてもらえればと思っています。6回シリーズを通してでも、あるいは、興味をお持ちいただいた回をスポットでも、お申し込みいただけます。多くの方々のご参加をお待ちしています。

回数	日時	講演タイトル	講演者	講演概要
第151回	令和8年 4月10日 (金)	地球温暖化と豪 雨災害	佐山 敬洋 (防災研究所 教授)	近年、地球温暖化の影響が顕在化し、豪雨による洪水災害が激甚化しています。地球温暖化が及ぼす水災害への影響を科学的に理解し、将来のリスクを推定し、さらにリアルタイムで状況の変化を予測するためには、水の循環を科学的に扱う水文学の知見と技術が欠かせません。本講演では、洪水を予測する数値モデルや観測データの活用など、防災の科学的アプローチを紹介します。また、最新の温暖化影響評価や流域治水の取り組みを取り上げ、科学が防災・減災に果たす役割と、それを踏まえて私たちが採るべき行動について考えます。
第152回	令和8年 6月5日 (金)	自己集合科学の 新しい世界	上杉 志成 (高等研究院物 質－細胞統合シス テム拠点長/化学 研究所 教授)	京都大学iCeMSでは、分子が自発的に集まり、形や働きを生み出す「自己集合」を研究しています。細胞の中では、タンパク質が集まって「しずく」のような構造（細胞内自己集合体）を作り、人体の情報伝達やストレス応答を助けます。一方、材料の世界では、MOFなどが規則正しく組み上がり、ガスの分離や貯蔵に役立ちます。本講演では、生物と材料に共通する「自己集合」を解説し、人類と地球の健康に貢献する自己集合科学の新しい世界を紹介します。
第153回	令和8年 8月7日 (金)	触媒が切り拓く プラスチックの 未来	田村 正純 (エネルギー理工 学研究所 教授)	マイクロプラスチックや海洋汚染などに代表されるプラスチックごみ問題は、近年ますます深刻化しており、その有効な処理・活用技術の開発は喫緊の課題となっています。また、石油資源の枯渇や炭素資源の循環利用の観点からも、プラスチックを化学的に資源へと変換するケミカルリサイクル技術の確立は必要不可欠です。本講演では、これらの社会的背景と課題を概説するとともに、我々が取り組んでいる“触媒的アプローチによるプラスチックからの有用化学品合成”について紹介します。
第154回	令和8年 10月2日 (金)	文学無用論—— フィクションは 何の役に立つの か？	森本 淳生 (人文科学研究所 所長)	近年「役に立つ」技術や学問ばかりが推奨され、文学研究の持つ意義が強く問われるようになってきました。文学、あるいは、フィクションは役に立つのか立たないのか。そもそも「役に立つ」とはどのようなことを意味するのか。一見役に立たないように見えるものにも役に立つところがあるのではないか。こうした問いを考えることは、文学やフィクションを越えて「人間」そのものの意義を問うことにもつながります。フランスの文学と思想を手がかりにしながら、文学の「無用の用」について考えてみたいと思います。
第155回	令和8年 12月4日 (金)	宇宙へと拡大す る人間活動を取 り巻く宇宙環境: 地球、月、そし て火星	小嶋 浩嗣 (生存圏研究所 所長)	私達の太陽系において、その宇宙空間は、「無」の領域ではなく、薄いプラズマという電気を帯びた物質で満たされています。宇宙環境は、この電気を帯びた物質であるからこそ、特殊な環境になっています。電気を帯びた環境、それは、普段、中性大気の中で暮らしている私達が経験している環境とはまったく異なります。そして、人間が宇宙へと活動範囲を広げたとき、その特殊な電気を帯びた環境で活動することになります。本講演では、地球、月、そして火星へと人間が進出していく中で、どのような宇宙環境を経験することになるのかについて考えてみたいと思います。
第156回	令和9年 2月5日 (金)	iPS細胞を用いた 神経再生	高橋 淳 (iPS細胞研究所 教授)	我々はiPS細胞から誘導した神経細胞を移植することによってパーキンソン病や脳梗塞の運動機能を改善することを目指しています。パーキンソン病に関してはすでに実際の患者さんでの治験を終え、安全性と有効性を確認することができました。脳梗塞に関しても動物実験では細胞の生着や行動改善が確認されています。本講演では、これらの成果について展望も含めて紹介します。

京都大学研究連携基盤
Kyoto University Research Coordination Alliance

受講申込みはこちら

以下URLまたは右のQRコードから
ご希望の開催回の一括申込が可能です。<https://www.kurca.kyoto-u.ac.jp/seminar>